長崎大学教育学部社会科学論叢　第59号　17～25（2000）

事物の区別について

――トマス・アクィナス　『神学大全』第Ⅰ部，第47問題――

飯　塚　知　敬

On the Distinction of Things

―― Thomas Aquinas : *summa theologiae* Ⅰ, q. 47 ――

Tomoyoshi IIZUKA

はじめに

トマス・アクィナスは『神学大全』(1) 第47問題で，事物の区別 distinctio rerum について一般的に論じている。これは事物の神からの流出としての創造creatioについて論じられる過程で，事物の区別 distinctio と不均等性 inaequalitas などが直接，神に由来するのかどうかが問題とされているのである。この第47問題は以下の三つの項からなっている。

第１項　Utrum rerum multiduto et distinctio sit a Deo.
　　事物の多数性や区別は神に由来するのであるか。

第２項　Utrum inaequalitas rerum sit a Deo.
　　事物の不均等性は神に由来するのであるか。

第３項　Utrum sit unus mundus tantum.
　　ただ一つの世界が存在するのであるか。

この世界における事物が多であること，つまり多様な種に分かたれ，さらに個体としても種々であることは我々にとって自明のことである。トマスはこの第47問題において，この世界における事物の多様性，区別などを前提した上で，その多様性，区別が直接神に由来することを明らかにしようとしている。それはそのことが彼の創造論と深い関係を持つためと考えられる。

第１項においては事物の区別，多様性が直接に神に由来することが一般的に論証される。第２項においては区別の一種としての不均等性 inaequalitas もまた神に直接由来していることが示される。そして第３項では世界の一性が示されるが，これもこの世界の事物が互いに一つの秩序によって秩序づけられていることから論証される。この小論においては多様な内容に関わるこの第47問題について，トマスの項の順序に従いながら考察し，彼の創造論の理解を深めると同時に世界の一性の問題についても理解を深めたい。

第一章　事物の区別は直接神に由来する。

第1項での異論は3つ提出されているが，いずれも一なる神と結果としての事物の持つ多様性とが矛盾しないかということを問題とするものである。これらの異論に対するトマスの基本的な答えは第一異論解答にあるように，神のように意志的な能動者は，知性的形相を通して働くのであり，神の知性が同時に多を認識することと，神自身の単純性とは矛盾しないというものである。

しかし，この世界の多様な事物を原因することと神の単純性とが直接には矛盾しないとしてもそれなら何故，単純であり一である神から多なる事物が生じなければならないのか，という理由は明らかではない。本文においてトマスは先ず，事物が区別されてあることの理由について，それまでの主要な3つの説明を挙げそれらをいずれも退けている。それらの説明は事物の区別の理由を直接神にではなく，被造物自身のうちに求めようとするものである。

① 第1の説はこの世界の事物の多様性の原因をマテリアに帰するものであり，それはデモクリトスを始めとする古代の自然学者たちの説であったとする。

② 第2の説はマテリアと能動者の両者に事物の区別の原因を帰する説で，これをトマスはアナクサゴラスの説だとする。トマスはこの説を知性がマテリアに混合していたものを引き出すことにより事物の区別が生じるとする，と解釈している。

③ 第3の説は神から産出された第二原因としての能動者が次々とそれ以下の能動者を産出するという新プラトン主義的な説明であり，トマスはこれをアヴィセンナの説としている。

次にそれぞれの説に対するトマスの批判について考えてみよう。

①の説に対して。この説だとマテリアの運動によって区別が生じる。そして自然学者たちは事物の区別は偶然の所産だとしたとトマスは述べている。

②の説に対して。この説に対してトマスは二つの理由を挙げて批判している。第一の批判はマテリアの内に区別が見られたのだとすると，さらにその区別の理由を求めなければならない。マテリアを創ったのは神なのだから，何故神がマテリアの内にそのような区別を置く必要があったのかを説明すべきだと考える。また第二の批判はマテリアの内に区別の原因を求めるべきではないとするものである。マテリアの内に区別があるのは，形相が区別されてあるからであり，「マテリアのために形相があるのではなく，形相のためにマテリアがある」(2) とトマスは主張する。だから事物に区別が存在することの理由を求めるためには，何故種々の形相があるのかを知るべきであり，従って形相を与える原因について，それらの区別の理由を求めなければならないことになる。

③の説に対して。この説では神から事物が段階的に産出されてくるとされる。先ず，神が自己自身を認識することにより第一知性実体が産出される。これは神により創られたものなので，存在と本質の複合を含み，従って可能態を持つ。被造物であるこの第一知性実体が第一原因を認識することにより第二実体を生み，また可能態に在る限りでの自己を認識することにより天体を産出する。また現実態に在る限りでの自己を認識することにより世界霊を生じる。このような説に対してトマスは二つの点で批判する。第一の批判は被造物

が事物を創造することは出来ないとする批判である。天体や知性実体など，生成消滅することのない被造物は創造によってしか存在することができない。アヴィセンナの説ではそれを被造物が産出したことになるがそれは不可能であるとトマスは考える。また第二の批判はこのように段階的に事物が産出されていくことで種々の事物が生じると説明されたとしても，事物の区別は何故必要であったのかということの説明にはならないというものである。何故なら，神が直接原因しているのは最初の第一知性実体のみであり，それ以下の事物の産出は神の一なる意図 intentio に基づくわけではない。すると，この世界の内に事物の区別が見られるのは複数の能動因による多くの原因がたまたま合流した結果であって，従ってそれらは偶然の結果だということになる。そして世界は種々の事物から構成されることで，その完全性を得ているように思われるが，これは偶然に過ぎないということになってしまう。

この章の始めに，神自身は単純であり一であるが，知性的形相を通して働くのであるから，神自身の単純性と結果における多様性とは必ずしも矛盾しないことを見た。しかし，それだけでは何故，この世界に事物の区別が見られるのかについての積極的な説明とはなり得なかった。またこれまで見てきたように，その説明を被造的事物そのもののうちに求めようとしても，多様な事物の存在を前提した上で，それぞれの事物にそれぞれの多様な質料因や能動因の系列を配するだけであり，これでは事物が相互に異なっているのは偶然の結果だということになり，そもそも何故この世界に事物の多様性が存在しなければならないのかということに対する積極的な理由とはならなかったのである。けれども，トマスのこのような批判はトマス自身の創造論の立場から出てくる批判であるということもできるであろう。つまり，トマスがこの世界の事物について神が直接にその存在を原因しているとするために，その多様性そのものが偶然ではなく，神の配慮に基づくという見方が生じてくるのである。

トマスは創造の前提に立って，この世界の多様性に積極的な理由を与えようとする。それは区別 distincito の存在する理由，つまり区別が存在することの目的因を考察することになる。今，AとBの事物があるとする。トマスの創造論の立場に立つと，それらは存在する以前に神によってそれらの本質や，それらの付帯性が互いに対比的に捉えられ，両者が一定の関係において秩序づけられてあることが認識された上で，神によってそれぞれがそれらの存在において産出されるということになるであろう。神はAとBとを種において同一にすることもできたはずである。また世界の一切を同一に産出することも可能であったはずである。それゆえトマスはこの世界の区別の存在根拠を神の世界の産出の目的そのものの内に求めようとする。

それでは何故神は世界を産出したのか。それは神が被造物に自分の善性 bonitas を伝えるためであり，被造物を通して神の善性を再現 repraesentare するためであるとする。(3) 神の善性自身は一にして単純であるが，そのような善性を再現するためには被造物は逆に多にして多様であることが必要であったのである。それぞれによって補完し合い，全体としての世界が他のなによりも，神の善性をより完全に分有し，再現しているとトマスは結論する。

このようにトマスはこの世界の事物の多様性の理由を，神の善性を再現するためであると説明する。それは第二異論解答にあるように，この世界の事物が神をその範型 ex-

emplar としてその本質に類似化されているからであると言える。神の本質は善性と同様，それ自身としては一にして単純であるが，同時に無限で多様な形相を生み出している。だからこの世界の多様性はそれらの形相の無限の内容に類似化されるのであるが，同時にまた神の本質は一なのだからこの世界の事物も多様であると同時に神の意図によって一性を持っているはずである。このことは第3項で論じられるが，このような世界の事物の多様性と一性の問題は，神における一とその力における多とに対応していると考えられる。従って，トマスがこの世界における事物の多様性を問題とする時，それは単に多様性，区別性だけを問題としているのではなくて，同時に世界の一性を問題としていることが理解されてくる。何故なら，トマスがここで問題としている多様性とは個々の事物が多様であると同時に全体が意図において一であることが前提されているような多様性，区別性だからである。その意味ではこの世界の多様性と一性の問題は，少なくともトマスにおいては神によるこの世界の創造ということが前提されることによって，生じてきていることになる。

第二章　事物の不均等性は直接神に由来する。

続く，第2項においては事物の不均等 inaequalitas が直接神に由来するのかどうかが問われている。不均等とは区別 distinctio の一種であると考えられる。それゆえ第1項で事物の区別が直接神に由来することが示されたのだから，不均等性も神に直接由来するとしてよいはずである。実際この第2項において，トマスはそのように結論している。しかし，彼がここで不均等性について改めて論じている理由の一つは，それがアリストテレスのいう「配分の正義」の問題と関わっているからである。第三異論において提出されているように不均等なものに対して不均等なものを与えるところに配分の正義は成立する。ところがトマスの創造論にたつと，神が無からいきなり多様な，区別された事物を創造するのである。それらの多様性の理由は第1項で述べられたように，全体として神の一なる善性を再現するためと説明されたが，しかしその結果として個々の事物はいきなり不均等な状態に置かれて産出されているのである。それゆえそれぞれの事物にとっては何故自分が優劣の秩序においてその与えられた位置に置かれたのか理由が分からないはずであろう。その意味ではこの問題もトマスの創造論の立場によって生じて来た問題だということもできる。

こうした問題を説明するために神は最初すべての事物を等しいものとして創ったとする立場があったことをトマスは本文で紹介している。それは例えば次のようなオリゲネスの説である。オリゲネスはこの世界の事物の区別を善と悪の二つの対立する原理から説明しようとするマニ教的な立場を排除しようとして，神は始めすべてのものを等しいものとして創造したと考えた。それらは始め同一の理性的被造物であった。ところが彼等は自由意志に基づいて，あるものどもはそれぞれの程度に応じて神へと向き返り，あるものどもはまたそれぞれの程度に応じて神から離反した。そこで被造物相互に区別が生じた。

神へと向かった理性的被造物はそれぞれの功績の程度に従って，一定の階層を形成する天使として高められた。他方，神から離反した理性的被造物はそれぞれの罪の程度に従って種々の物体と結合された。これが物体が創造され，相違していることの原因であるとオ

リゲネスは主張したとする。

第1項との関連でみると，この説も世界の事物の区別の理由を被造物の内に見出そうとするものであると言える。そして神からの距離に事物の区別の理由を求めようとする点では先のアヴィセンナの説に似ている。ただ神からの距離の相違を被造物の自由意志に基づかせる点が異なると見ることができる。

ところでトマスはこのオリゲネスの説を次のように批判している。この立場では物体の産出は神から離反した理性的被造物を罰するためだということになり，物体の存在には消極的な意味しか与えられないことになる。しかし，トマスは第1項で神がこの世界を産出したのはあくまでも被造的世界において神の善性を再現するためだとしたのであった。彼は『創世記』の「神が造ったすべての物を見られたところ，それは，はなはだ良かった。」(4) という言葉を挙げて，このオリゲネスの説に反対する。またアウグスチィヌスの『神国論』(5) からの引用を行って，もしもこの物体的世界のあり方が個々の理性的被造物の自由意志の選択に基づいて形成されたとすれば，例えばこの世界に太陽が1つであるということも神が予め世界の全体の善さを考慮して決定したことではなく，単にそれぞれの理性的被造物の選択の結果によるだけの，偶然の結果となってしまうだろうとしている。

ここでのトマスの批判を改めて考えて見よう。トマスが何故事物の区別，ここでは不均等性であるが，の原因を被造物に求めずに直接神に求めようとしているかというと，それはこの第2項におけるオリゲネスの場合のように，イ）一つには神からの隔たりで事物の相互の区別の原因を説明しようとすると，物体的なものが悪の意味を帯びてくることである。しかし，トマスはこの世界の区別がもともと神の善性を再現するためのものであり，どの事物も神の一定の善性を再現するために産出されているとするのであり，従ってこのような説を退けなければならない。ロ）またもう一つにはこの世界のあり方が神の予め定められた一なる意図に基づいたものでなくて，単なる被造的な諸原因の偶然の結果に過ぎなくなるというものである。

だから逆に言うならトマスの説，つまりこの世界の事物の区別を直接神に由来するとする立場は，そのことによって，この世界のすべての事物は予め神がその一なる意図においてすべてを見通し，それらを相互に秩序づけておいた配慮に基づく結果なのであり，従って決して偶然の結果ではないこと（ロ）に対する批判）を基礎づけるものであり，また多様な事物からなる世界が，一なる意図に基づき，一なる秩序に基づいて配置され，存在を与えられていることにより，それぞれがそれぞれの善性に基づいて世界の完全性，一性に貢献していること（イ）に対する批判）を基礎づけるものとしてあると考えることができよう。つまり先のイ）とロ）とを批判するためにはこの世界の事物の区別を直接神に由来するとしなければならない必然性があったと考えられるのである。

それゆえ本文のトマスの説明は(6) 先ず事物の区別が，形相ないし種 species に基づくものと，マテリアに由来するものがあることを述べ，後者は前者のためにあるとする。例えば不可滅的な存在は自らの種を維持するために一つの個体で十分であるが，可滅的な存在はその種が維持されるために多数の個体を必要とするのであって，数的な相違は種，形相の違いに基づいている。ところでこの形相に基づく相違においては，それぞれの形相が段階的に不均等性を帯びている。例えば元素，植物，動物，などのようにそれぞれ完全性において一定の段階を形成している。これらの完全性の段階は世界の全体としての完全性

のためであり，それを原因しているのは神であるとする。つまり例えば，世界が単一の種からできており，一つの善性しか示さない場合と，多様な種を含みそれらが種々の段階の善性を示す場合といずれが世界として完全であるかといえば，後者であるとトマスは考える。

だからこの世界に事物の相違が認められるのは，第1項において見たようにそのことにより神の善性ができるだけ再現されるためであると説明されたのであるが，そのことは世界を中心にして考えてみると，世界の内にできるだけ多様な善性が存在し，しかもそのことにより，世界が世界として最善の完全性を持つように神が予め配慮したということになるであろう。

それゆえ第一異論において問題とされているように，最善の者は最善の物を結果するはずである。ところが結果としての最善の物のうちには各部分の優劣はないはずである，何故ならそこにおいては全てが最善なのだからという異論に対して，トマスは次のように答えている。(7) 最善の者は最善の物を導き出す。しかし最善の物においてはそれらのどの部分も最善であるべきではない。各部分が全体への対比において最善の物であるようにするのが最善の者のやり方であると。例えば動物を最善にする場合には，全体の完全性に対応して，目の部分は目の部分の，その他の部分はその部分に相応しいそれぞれの高貴さを持つべきなのであり，すべてが同一の高貴さを持つべきではないのである。

だからこの解答から理解されることは，先にロ）として挙げたように世界の完全性というのは全体のすべての存在が予め互いに対比され，秩序づけられたものとして一なる意図の基に産出されることが必要であること。そのためには神によってこの世界がその区別において，つまり一定の秩序によって秩序づけらたものとして直接に産出されることが必要だったということである。

最後に先の第三異論の解答を検討してみよう。これは配分の正義に基づくものであった。配分の正義においては不均等なものに対して不均等なものを与えるところに正義が成立する。ところが神は無から各事物を不均等の状態に産出したとすると，もともと不均等でないものにいきなり不均等なものとして産出したことになり，これは配分の正義に反するように思われる。

これに対してトマスの立場からは次のように答えられよう。予め各部分が存在して，それらに何かの相違がある場合には，それらに対して相応しいものを与えるところに配分の正義は成り立つ。しかし，創造の場合は各部分というものは予め存在していたわけではなかった。だから，各部分に相違が与えられるのは全体の完全性のためである。(8) 全体の完全性のためにそれらは相違したものとして産出されたのであり，それらの各存在が善きものであるように，それらの特殊性も全体の完全性のために善きものとして産出されているのである。

つまりこの世界の事物が予め神の一なる意図に基づいて産出されてきたということは，それぞれが始めから世界の一性と完全性の中で一定の役割を果たすべきものとして，その特殊性において産出されているとトマスは考える。だからイ）において見たように，物体的なものは決して無条件に他の事物との比較において産出されているのではなく，世界全体の完全性という目的に応じたものとして一定の特質を持つものとして産出されているのである。

だから，トマスは存在の種々なる段階を世界という一なる全体の中でそれぞれが全体の完全性のために一定の役割を果たすべき存在として理解しようとしている。それはイ）での考え方のように神というものを非質料的なもの，純粋形相の極限と捉え，そこからの隔たりの根拠をマテリア性に置くことにより，各存在の優劣の段階を理解しようとするのではなくて，先ず各事物がそこに属する世界の一性を前提し，その一なる世界の完全性のために一定の役割を果たすものとして，機能的な意味でそれぞれの存在の段階が理解されているのである。この見方ではたとえマテリアでもそれが世界の完全性のために一定の働きを行う以上は善き物といわなければならないであろう。

第三章　ただ一つの世界しか存在しない。

第3項では第一異論や第二異論におけるように，次のような疑問が提出されている。つまり，神の力が無限である以上，神が世界を複数個作ることは可能であるとしなければならない。同時にもしも世界を1個創ることが善いことだとすれば更に2個，3個と創ることの方がより善いことではないだろうか。それなら神が1個の世界しか創らなかったとするより，複数個創ったとする方がより合理的ではないだろうか。

しかし，この疑問については世界が数において増加することが単純に善いことなのかという批判が提出される。トマスが第二異論解答において述べているように，もしも1個よりも2個の方がより善いとするなら，更に3個の方が2個よりもより善いことになり，次々と進行して，結局神は無限個の世界を創ることになってしまうであろう。これでは現実の行為の目的とはなり得ないであろう。

けれどもこの解答における説明によって，数的に多い方が単純により善いとする立場は退けられるが，世界は何故1個しかないのかということは説明できない。しかしここでトマスが主張しようとする一性の根拠は世界が秩序において一であることである。(9) トマスは本文で，世界を秩序づける知恵を措定しなかった人々，世界の結果を偶然によるとした人々が複数の世界を措定できたのであると述べている。そして例えばデモクリトスはこの世界をアトムの集合によってできたとしているので，他の無数の世界も同様にアトムの集合からできているという見解になったとしているのである。

トマスはこの世界における秩序の一性から世界の一性を論証しているのであるが，この世界の一性という前提に立つことで，同時にアリストテレス以来の旧い世界像をそのまま踏襲している。第三異論解答にあるように，今日の世界像からすれば誤りである説明も行っている。つまり，すべての「土」は世界の中心へと集まってくるのだからこの世界以外に他の「土」はありえないとするものである。

しかし，トマスが考えているこの世界の一性の根拠はこのような旧い世界像に基づくものではなかった。これまで見てきたようにそれはこの世界が，一なる神によって創造され，神の一なる意図に基づいて秩序づけられていることにあったのである。そのことは第2項においてみたようにこの世界のそれぞれの事物がこの世界の完全性に対応する形で，予め神により機能的に配慮され整えられた形で産出されていることを意味していた。だから世界が神における一なる意図に基づいており，それぞれの事物はその意図に対して内的に整

えられているという思想は，その意図を人間が色々に構想することによって，世界の一元的な理解へと向かわせるものであったと考えられる。先に見たようにこの世界の事物の区別をこの世界から説明しようとする限り，この世界の多様性は偶然としてしか理解されず，この世界の多様性そのものからこの世界の一元的な説明を構築することにはならなかったであろう。

また世界の存在の多様性の根拠を純粋形相としての神からの隔たりとして説明し，この世界の事物の区別の根拠を神からの絶対的な距離に求めるのではなく，この世界の一性にそれぞれの仕方で与っていることから説明しようとするトマスの立場に立ってこそ，この世界をこの世界から統一的に説明しようとする立場が生じてきたのではないか。その意味ではトマスの創造論に基づく事物の区別の解釈は新しい世界像の構築を促したと言うことができるのではないだろうか。

考察のまとめ

最後にこれまでの各章での考察の要点を挙げることで考察のまとめとしたい。

第一章。この世界の事物が多様であるということをトマスの創造論の立ち場に立って考えると，神が多様な世界全体を一なる意図のもとに産出したということであり，従ってこの世界の多様なる結果は決して単なる偶然ではあり得ないということである。また神が産出の始めから世界を多様なものとして意図していたのはそのことにより神の善性を被造的世界においてより多く再現するためであった。

第二章。この世界における事物の多様性は神の善性をより多く再現するために神によって予め意図されたものであり，従って，事物の多様性を神からの隔たりという仕方で消極的に説明することはトマスの立場に合致しないものであった。そしてこの世界の多様性をトマスのように積極的に捉えるためには，この世界の結果が単に偶然によるものではなくて，神の一なる秩序に従って，一なる世界として完全性を目指すものとして理解されることが必要であった。

第三章。トマスはこの世界を一なる世界として捉えるがその一性は神によって世界が一なる秩序に基づいているということによるものであった。この世界の多様性のもとには一なる神の意図があり，この世界の多様性は決して偶然ではない。そしてこの世界においてそれぞれの事物が一定の特殊性を持っているのは一なる世界との内定な関わりを持つものであり，それらを考察することで新たに一なる世界像を構築することへと促すものであったと考えられる。しかしトマスの世界の解釈が新しい世界像の構築と具体的にどのように関わったのかの検討は今後の課題としたい。

註

1）テキストはマリエッチ版を使用した。

2）*S.T.* q.47, a.1, c. quia materia est propter formam, et non e converso.

3）*ibid.* c. Produxit enim res in esse propter suam bonitatem communicandam creaturis, et per

eas repraesentandam.

4）『創世記』 1－31 日本聖書協会訳による。トマスのテキストでは Vidit Deus cuncta quae fecerat, et erant valde bona.

5）Augustinus, *de Civ. Dei* Ⅵ.C. 23

6）*S.T.* Ⅰ, q.47, a.2 c.

7）*ibid.* ad 1, optimi agentis est producere totum effectum optimum: non tamen quod quamlibet partem totius faciat optimam simpliciter, sed optimam secundum proportionem ad totum:

8）*ibid.* ad 3, Sed in constitutione rerum non est inaequalitas partium per quamcumque inaequalitatem praecedentem vel meritorum vel etiam dispositionis materiae; sed propter perfctionem totius.

9）*S.T.* Ⅰ, q.47, a.3, c. Mundus enim iste unus dicitur unitate ordinis, secundum quod quaedam ad alia ordinantur.